

文窓

ふみのまど・fumi no mado

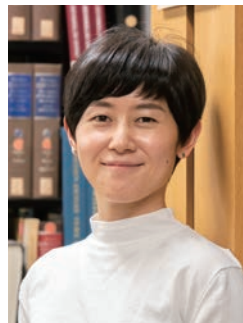
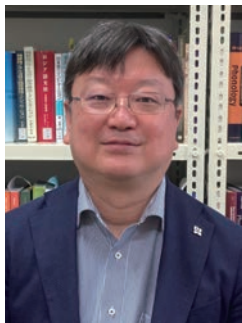
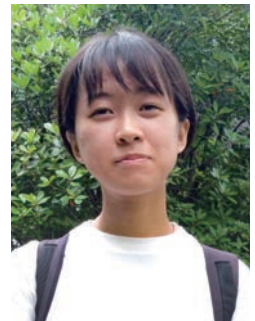
神戸大学文学部 同窓会 文窓会

事務局：〒657-8501 神戸市灘区六甲台町1-1
TEL&FAX 078-806-7207 (水曜日11時~16時)
<https://www.bunsokai.com/>

連絡用メール：bunsokai_renraku_toiawase@yahoo.co.jp

文学部：総務係 TEL 078-803-5591 FAX 078-803-5589
教務学生係 TEL 078-803-5595
<http://www.lit.kobe-u.ac.jp>

21号
2023.9.30



特集／10周年を迎えた「神戸オックスフォード日本学プログラム」 特別寄稿「文学部のこれまでとこれから」

文窓会ホームページのURL がシンプルになりました!

<https://www.bunsokai.com>

スマートフォンでも文窓会ホームページへ! 右のQRコードを
読み取り、画面に出る指示に沿って操作するだけ。

スマートフォンはこちら▶▶▶





学部長あいさつ

人文学研究科長・文学部長
長坂 一郎

学部長に着任して3年目となりました。そうした中で、あらためて文学部は「ことばを大切にすることだ」という思いを強くしています。

最近、商用利用が始まった ChatGPT が発するものも「ことば」です。ChatGPT は大規模言語モデルと呼ばれる機械学習の自然言語処理モデルを発展させたもので、膨大な量のテキストデータを収集し、文章中のことばの関係を推論させるものです。

このような AI の登場により、多くの分野が影響を受けており、その一つに大学教育が挙げられています。例えば、大学の授業では多くのエッセイやレポートを書きってもらうことがあります。まさに ChatGPT が得意なのは、あらゆる分野の過去の情報を集めて自然な「まとめ」(レポート)を生成することなのです。そこで驚くのは、ChatGPT が生成する文章を読んでいると、ある種の創造性すら感じられる時があることです。このような状況の中で、ChatGPT を一時禁止した国や地域もあったようですが、そうした後ろ向きの対応ではなく、我々はすでにこうした AI が存在する世界に在るということを受け止めて、その中で「ことばを大切に」時代に生きているのだということをも前向きに捉えるべきだと思っています。

このとき「ことばを大切に」するという姿勢のあり方が問われます。15 世紀にグーテンベルクが印刷機を発明した時も、ことばが世界に与える影響は本質的に変化しました。それまでは写本や口伝といった手段で広まっていた情報の伝播速度が一気に増しました。ただ、これはある意味、伝達形式の変化であり、内容の変化ではありませんでした。しかし、AI はその情報の内容にまで踏み込んでいきます。そのとき、「ことばを大切に」とはどういうことなのでしょう。それは、これから私たち一人一人が考えていくことだと思いますが、一つ言えるのは、創造性とは何か、Creativity とはどういうことなのか、ということが問われているということです。

私は、創造性には二つの側面があると考えています。一つは調和を求めるというものです。何かと何かの間に調和を見つけ、そこに創造性を見出す。これは、言葉と言葉の関係を統計的な手法に基づいて推論する ChatGPT などの大規模言語モデルが得意とする領域です。創造性のもう一つの側面は、「逸脱」です。ここでの「逸脱」は、文脈を離れ、確立した領域知識を否定し、統計ではなく、なんらかの基準でまだ捉えられていない何かをつかみ取る、そうした作業の中に「ことばを大切に」意味を見出す、そうした営みです。こうした営みが、間違いなくこれからの文学部では重要になってくると思います。

文窓会の皆様には、日頃からご支援を賜り、大変感謝しております。こうした激動の時代に、新型コロナウイルスの影響から回復しつつある学生たちに、これからも温かいご支援やご協力をいただけますよう、心よりお願い申し上げます。



「いつもの姿が戻りつつあります」

文窓会会長
武藤 美也子

3年間我々に種々の規制をかけてきたコロナ感染症が、ようやく5月8日に感染症法上は第5類感染症に移行しました。

いつも文窓会へ多大なご協力をいただき感謝いたしております。

この規制のなくなった毎日を元気に楽しんでおられるでしょうか。文窓会も大学も少しずつ元の活動を取り戻そうと動いています。

去年は「文窓賞」の表彰式もHCDで対面で行い、受賞者には一言挨拶してもらいました。ただ懇親会は大事をとって開催を見送りました。今年は開催予定で、身近でお話していきましょう。

12月17日には「KOJSP10周年記念会」が開かれました。文学部は2011年からオックスフォード大学東洋学部(現アジア中東学部)との間で「神戸オックスフォード日本学プログラム(略称 KOJSP = Kobe-Oxford Japanese Studies Program)」を進めており、10年を迎えました。

<http://www.lit.kobe-u.ac.jp/graduate/kojsp.html>
今号の『文窓』では記念して KOJSP の特集ページを組みました。

また変わりゆく文学部の姿を、今後も見据えて長坂文

学部長に書いていただきました。

12月25日には「One Kobe Family」として「神戸大学校友会」が発足。これは全学部の卒業生・大学生・教員等が一体となり、神戸大学のますますの発展を願って創成された組織です。

今年になり4月12日には3年ぶりに新入生歓迎会を開くことができました。新入生103名で、そのほとんどの学生が参加してくれました。授業が始まってすぐの開催で、こちらの思い通り新入生の熱意は高く、先生方も新入生の熱心な質問に、丁寧に答えていらっしゃいました。今年の新入生は高校生活3年間をコロナ下で過ごしており、このような対面での仲間との語らいは新鮮で嬉しいものだったようです。ようやく大学に学生が戻り、お互いに研究に取り組む姿が帰って来ました。

文窓会も2022年度からは新メンバーを迎え事務局も一新し、2023年度からは対面で役員会が行われています。より身近で有用な同窓会であるために、どのような活動をすれば良いのかを考えています。ご意見、要望等をぜひお聞かせ願えればと思います。

文学部HCDは今年是对面です。10月28日開催で、裏表紙に詳細を掲載しています。先に書きましたように懇親会も開催予定です。多くの方が参加してくださり、対面で話ることができるのを楽しみにしています。

コロナ感染症は5類になったとはいえ、まだまだ変異を続けていますので、くれぐれもお体に気をつけてお過ごしください。

最後にご健康とご活躍を心から祈っております。

今後とも文窓会への応援・ご協力をよろしくお願い申し上げます。

神戸大学文学部生の人間力・文学力・未来を応援する

第17回 文窓賞 2023年

学生レポートコンクール結果発表

大学生生活も、やっとコロナ禍以前の状態に戻りました。しかし、この3年間はそれぞれの考え方や行動に大きな影響を与えたことが作品に現れています。今年の応募は8作品、審査結果は下記の通りです。

優秀賞(表彰状と賞金5万円)

「弾け、ピンボール」 橋本翔匠(国文学4回生)

思わず身体が反応するタイトルだ。筆者は、コロナ禍で出来ること、やりたいことを探し、それに向かって動いた。その一つは、休眠状態の「芸芸研究会」を生き返らせ、地域貢献にまで成長させた事だ。筆者が実現のために模索し、行動する姿勢に共感、協力する人が現れた結果であろう。

構成も良く、表現したいことが明確に伝わってくる作品だ。人生いろんな困難や障害にぶつかる。この自粛期間の経験を活かし、根っこはしっかりと張って、面白い盤面に飛び込んで、おおいに弾けてほしい。

佳作(表彰状と賞金2万円)

「変化と不変、その中の文学」 光野麦穂(1回生)

パンデミックは社会の変化を加速させた。AIや最新技術がなんでもできる時代に人間にしかできないことは何か。本を読むことにより培われる共感する力や物事の本質を見抜く力の重要性を強調する。

共感できる作品。多くの本を読み、人と話し、豊富な想像力と表現力を身に付けてほしい。

佳作(表彰状と賞金2万円)

「言葉が私を歩かせる」 中原幸子(国文学4回生)

就職場所に頭を悩ませる筆者に決断のヒントを与えたのは、『君の臍臓をたべたい』の中で強く残った言葉だった。そこから、言葉や文章の持つ力や意味を考える、国文学を学ぶ学生らしい作品だ。

「言葉により思考が固まる」、それは言葉と文字を持つ人間に与えられた特性ではないだろうか。

新人賞(表彰状と賞金1万円)

「教養人の孤独」 清水さやか(1回生)

教養とは、教養人とは……興味深い考察を展開している。しかし、生半可な知識を持つことで孤独になるほど、世界は狭くも、浅くもないはずだ。恐れず、大いに学んで、大きく成長してほしい。

選考を終えて

「文学部とは、人を学ぶ学部だと思っている」、応募作品のうちの一行、同感です。人間とは何か？ 人の幸せとは何か？ AIやナノテクノロジー等々の技術が重視される現在です。それが暴走しないで、活かせるような、真に持続可能な社会にす

るためには、深く、広く、様々な観点から考える必要があります。そうした人材が文学部で育まれると思います。読み、考え、行動し、それを是非文書にして又応募ください。

(文責 審査委員長 西川京子)

選考委員

長坂一郎研究科長(芸術学 教授) 白鳥義彦副研究科長(社会学 教授) 武藤美也子 日高健一 三宅征彦
廣野幸夫 吉田浩次 中川伸子 中畑寛之 津田薫 梅村麦生 西川京子 (計12名)

特集

10周年を迎えた「神戸オックスフォード日本学プログラム」

KOJSPの10年と今後

田中 真一(人文学研究科 言語学教授)

第10・11期アドバイザーボード長:2021.10~2023.9

神戸オックスフォード日本学プログラム(KOJSP)は、オックスフォード大学アジア中東学部(旧東洋学部)日本学専攻の2年生全員を1年間、神戸大学文学部に受け入れ、日本語と日本学を教育するというユニークなプログラムである。2012年10月から開始し、昨年で10年を迎えた。それを記念するイベントが12月に開催され、修了生と新旧関係者が集い、ともに10年を祝った(文窓会にも温かいご支援をいただいた。改めてお礼申し上げたい)。

筆者は2010年10月に文学部に着任した。ちょうどプログラム開始の準備段階にあり、周囲で頻繁に会議が行われていたのを覚えている。開始ほどなくして、アドバイザーボードと称する運営メンバーに加わった。以来、役割を変えながら何度か委員を経験し、現在に至っている(少なからず関わったことになるが、それは自宅がKOJSP生の寮と近いからではないかと思ったりする)。修了生の多くは大学卒業後、世界中で活躍し、また、開始時期のメンバーの多くは定年、移籍で文学部を離れた。皆年を取った。

KOJSP生は毎年10名程度が来日し、現時点で約110名の修了生を輩出している。その数は文学部の1学年分に当たる。学生チューター、委員、指導教員として関わった教職員もそれぞれほぼ同数で、合わせて数百名に及ぶ。大人数で密に関わるため、時として小さな問題、小さくない問題が生じるが、その都度、皆で知恵を出し合いながら対処してきた(時にはうまく行かず頭を抱えたり、ボヤいたりすることもある)。先人のおかげで、10年の間に種々のノウハウが蓄積され、プログラムは安定的に継続している。学生のほとんどが、日本語能力も専門知識も飛躍的に伸ばし、神戸での1年に満足して帰国する。それが、本プログラムが10年続いた大きな原動力となってきた。オックスフォード大学スタッフとの長年に渡る良好な関係も大きな支えである(プログラムと関連させながら、頻繁に研究イベントを開催し、交流を深めている)。

学生は個性的で、さまざまな面で文学部に刺激を与えて来た。とくに、8月に行われる修了発表会は1年間の研究・学習成果を披露する機会であり、テ

ーマ選び、分析、日本語によるプレゼン等、感心させられることが多い。筆者は指導教員としてもプログラムに関わってきた。数年前に担当したKOJSP生は、筆者の講義する言語学の専門授業に参加し、母語であるフィンランド語の言語現象について印象的な発言をしばしば行った。それが周囲の受講生の刺激となり、授業が盛り上がったことを覚えている。



どの組織にも多かれ少なかれカラーが存在する。KOJSP生も個性と同時に、集団としてのカラーを持っている。面白いのは、神戸で過ごすにつれ、KOJSP生としてのそれが現れることである。オックスフォード大学日本学専攻と神戸大学文学部が互いに影響を与え、独自の雰囲気醸成されているように見える。

さて、10年を機に、新たな試みが始まるとうしている。その一つは、活動を少しずつ他学部にも広げ、全学的な展開を図ろうとすること、もう一つは、プログラム充実のため、外部機関との関わりを持つことである。とくに後者については、今年から島津製作所との間に共同事業提携を結び、学術講演の開催、オックスフォードの研究者招聘、日本学教材の作成、インターンシップなど多岐に渡って協働する予定である。このうちいくつかは活動が具体的に始まっている。インターンシップについては、他に、JAL、株式会社福市(Love & Sense)とも関係が始まるとうしている。

このように、各時期のKOJSP生の個性、受け入れ側である文学部の工夫の積み重ね、また、オックスフォード大学との友好関係により、プログラムが継続してきた。この先も、良い面を残しつつ新たな試みが加わり続けることであろう。(僭越ではあるが)これまで本プログラムに関わって来られた方々、とりわけ、並々ならぬエネルギーを注ぎ献身的に関わって来られた歴代のKOJSP担当教員と、教務学生係担当職員の方々に、改めて感謝を申し上げたい。

KOJSP こぼれ話

芦津 かおり (人文学研究科 イギリス文学教授)
第6・7期アドバイザーボード長: 2016.10~2018.9

私が神戸大に赴任してまもなくKOJSPが始動し、神戸大教員としての歩みと共に、受け入れ教員、ボードメンバー、そしてボード長という具合にプログラムとの関わりを深めてきました。このたび「苦労談をぜひ」とお誘いいただき書きだしたものの、「書きたい」エピソードほど公の場には「書けない」ことに気づいたため、「苦労談」ともいえないちょっとした思い出話を記します。

幻のハイキングと「スニーカーぶるーす」

もう7、8年も前のことでしょうか。日本人学生と留学生(主にKOJSP生)の交流を図る「インターナショナル・アワー」が当時はほぼ毎週ありました。各専修がアイデアを持ち寄り、たこやきパーティーや日本美術教室などで、毎回それなりに賑わいました。たしか教員企画の回に「布引の滝ハイキング」を計画。当日は、履きなれないスニーカーにジーンズ姿で気合いをいれて出勤。同僚たちもリュックを背負い意気揚々と現れました…が、集まったのは教員三名だけ。けっきょく英米文学の共同研究室で肩を落としてお茶(+お酒)をすすっていました。我々のどんよりした気分を察した学生が、マッチの「スニーカーぶるーす」をBGMに鳴らすと大昔の青春の思い出までカブさってきて、妙に切ない冬の夕暮れでした(翌日が日本語試験だったため留学生の集まりが悪かったようです)。

附属高校との交流会

毎年恒例のこの交流会は、前半部で附高生とKOJSP生がそれぞれ英語のプレゼンを行い、後半は教室に分かれて日本語で交流するという内容でした。日本的気質ゆえか、英語教育への思い入れゆえか、高校側の熱意は並々ならぬもので、それは先方から予め送られてくる周到な進行表や講堂での生徒配置図などにも明らかでした。

それだけにボード長の私としては憂鬱だったのです。というのも、本校側ではこの交流会はあくまで課外活動の位置づけで、授業とも成績とも関係がありません。学生に準備を強制するわけにもいかず、「しっかり用意してね」とお願いするのが関の山。準備の進捗状況を尋ねるたびに学生たちは「だいじょうぶ!」とニコリ答えますが、その呑気な笑顔に一抹の不安を覚えつつ当日を迎えました。

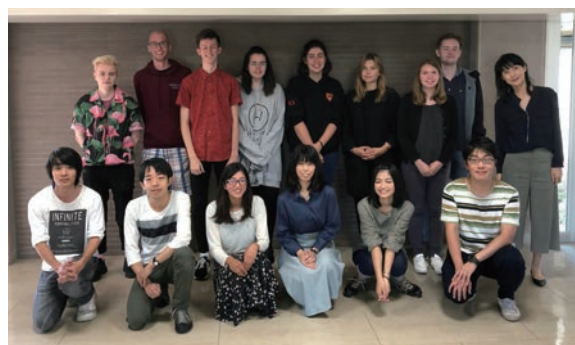
しかし意外や意外、当日は集合時間に遅れる学

生もなく、定刻に高校に到着。出だしは上々でした。つぎは何百人もの全校生徒が待ち受け、拍手で迎え入れてくれる「オックスフォード生入場」のセレモニーです。「早めに用意してね」「トイレは大丈夫?」と幼稚園の先生のように口をすっぱく



して注意しておいたのですが、いざお迎えが来て出発の段になると、半数以上のKOJSP生がわらわらと消えていき…皆さん「トイレ」だとのこと。

予定よりかなり遅れて入場し、ようやく交流会の開始です。まずは附高生の、まさに「秒刻み」の完璧なプレゼン(間違いなく入念な事前指導が!)のあと、いよいよKOJSP生の出番。先行バッターが悠然と立ち上がり、「データーを忘れた」と控室まで取りに戻り、さらに予定が遅れます。次は男女ペア(じつは恋人同士)による「ゴールデン・ウィークの冒険」という旅行報告記です。高校生たちの表情には「二人の関係は?」という疑問がありありと見てとれました。美しい風景が次々と映し出され、プレゼンが無事に終わりを迎えようとしていた最後の瞬間、ドーンと映し出された写真…(詳細は省略)。日本の高校生にはいささか刺激が強いものだったのでしょう。この写真を前に、生徒たちがにわかに騒然となったように感じられ、私は蒼くなったり赤くなったり…。しかし、そんな心配も杞憂だったようです。後半部の交流会でKOJSP生は高校生の心をつつり掴み、和気あいあいとした雰囲気の中別れを惜しんでいました。あの衝撃的な写真も、全体に「ゆるり」としたKOJSP生の行動も、高校の皆さんには日英の文化の違いを知るいい経験になったのでは、と今では前向きに捉えています。あれこれと気苦労が絶えませんでした。振り返ってみれば貴重な学びと交流の機会をいただいたと感謝しています。今後もプログラムが進化を遂げながら継続してゆくことを願ってやみません。



KOJSP7期生が国維寮に着いたときの写真です(2018年9月28日)。

KOJSP10周年記念会の開催

林 由華 (人文学研究科 言語学助教)

第10・11期 KOJSP 担当助教: 2021.10~2023.9

2022年12月17日、対面(文学部C棟大会議室)およびオンラインのハイブリッド形式にて、KOJSP10周年記念会が開催されました。学内からは、在籍しているKOJSP11期生をはじめ、チューターの神戸大生、日本語教員、人文学研究科教員、文窓会の皆さま、学長藤澤正人先生(ビデオ参加)、学外からは、KOJSP修了生、オックスフォード大ビヤーカー・フレスピック先生および萩原順子先生、オックスフォード大学日本事務所代表アリソン・ピール様、過去にKOJSPに関わられていた元人文学研究科教員と、多くの方々の参加をいただきました。

会の内容は、国内外で活躍する修了生5名のトークを中心として、歴代アドバイザーボード長や日本語教員によるKOJSPの振り返り、来賓の皆さまからの祝辞など、盛りだくさんなもので、食事休憩を含めた3時間半があつという間に過ぎていきました。トークしてくれたのは、1期生シャーロット・フィットさん(在英国日本国大使館)、4期生クラリッサ・クームさん(立命館大学)、5期生ハナ・ケントリッジさん(BBC)、7期生トッティ・タッパーさん(国費留学生日本語研修期間)、8期生ジュリア・フォランさん(オックスフォード・グローバル)です。お一人お一人が、KOJSPやその後のキャリアについて彩り豊かな経験をユーモアを交えて語り、後輩である11期生へのメッセージ、日本への思い、神戸側関係者への感謝などを伝えてくれました。

修了生たちのトークはどれも素晴らしいものでしたが、その中の1つの発表について少し紹介します。彼女が日本に興味をもったきっかけは、子供の頃に読んだ Young Samurai という小説だったそうです。そこから彼女は、武士道に憧れ、侍になりたいと思ようになりました。しかしもちろん、今の日本に侍はいませんし、武士道もいわば「作られた」文化のようなもので、現実の日本とは異なっています。渡航前からそれが分かっていたけれど、自分がそれをどう乗り越えるのか、試してみたい気持ちがあったとのことでした。留学生は、たいていこのように、興味の入り口になったものとその国の現実とのギャッ

プを味わいます。彼女は、それは単に留学というイベントにつきものであるだけでなく、人生においては理想と現実のギャップに悩み、それに立ち向かって乗り越えていくというこの連続であると話しました。そして、神戸滞



在中に行った広島での平和学習においてもそれを強く感じ、そのことが自分がどのようにして世界を良くしていくのか考える大きなきっかけになったとのこと。これから日本で公共政策を学び、日本とイギリスにとって役立つ人間になりたいと話してくれました。

何がきっかけで日本語や日本についての勉強をはじめたのかは人によって異なります。中には「自分にとって難しい言語にチャレンジしたかった」という日本社会自体とはあまり関係がないものもあります。しかし、縁を得て神戸に滞在し、様々な体験をする中で、自分の人生の一部として日本を受け容れ、関係を続けてくれる学生たちがいます。その過程を支えるものとして、KOJSP内の日本語教育、文学部での教育や教員や学生らとの交流、神戸の街の素晴らしさがあります。私は留学生教育において、日本を深く知ったうえで親しみをもち、日本と世界を繋いでくれる人材が少しでも多く育っていくことを目標としておりますが、この10周年記念会は、KOJSPにおいてそれが達成されていることを実感する貴重な機会となりました。現在在籍している11期生たちにも、これからの人生と今神戸にいることの繋がりについて深く考え、自信を持って歩む機会になったのではないかと思います。

最後になりましたが、この10周年記念会においては、武藤会長をはじめ、文窓会の皆さまに並々ならぬご支援をいただきました。文窓会のご協力なしには、この会を十分に執り行うことはできませんでした。ここに感謝の意をお伝えいたします。文窓会の皆さまにはKOJSP開始当初より応援をいただいておりますが、今後とも何卒KOJSPと文学部・人文学研究科の取り組みをお見守りいただけますよう、お願い申し上げます。

神戸・オックスフォード 日本学プログラム(KOJSP) 10周年記念会に出席して

西川 京子

(西洋史専攻・1969年卒／文窓会副会長)

KOJSPは2012年秋学期に始まり、10周年を迎えた。2022年12月17日、10周年記念会が文学部C棟大会議室で開催された。雨の降る、暗く寂しい冬の土曜日だった。

長坂研究科長の挨拶から始まり、歴代アドバイザーボード委員や来賓のスピーチが続く。数々のエピソードに笑いが起こる。

初日に腹痛を起こした留学生を連れて病院に駆け込んだ。ホームシックで体調を崩す学生、授業に全く姿を現さず、度々足を運んで説得を続けた学生もいた。

日本の学生に比べ個性的、やんちゃな学生も多い。対応に右往左往したが、振り返ると、一人一人が鮮やかに浮かぶようだ。

10年にわたり続いたのは、関係する人々すべての、並々ならない努力のたまものだろう。

記念会のメインテーマは、かつての留学生によるスピーチだ。3名の留学生たちのトークはまさに個性的だった。あるものは熱く想いを語り、あるものは、流れる川のように自然体で話した。いろいろな人と出会い、学び、考えた。そして、全員が声をそろえた。

「KOJSPの留学は、自分の人生に大きな影響を与えた」

窓の外の天気とは裏腹に、会場は、笑いと熱気と拍手につつまれていた。

KOJSPは、故池上氏が文窓会会長の時に始まった。武藤文窓会長の挨拶にもあったが、前会長はその始まりに大きな期待を抱いていた。10年前の「文窓」を開くと、会長挨拶の言葉から、池上氏の高揚感が伝わってくる。

「日本語でのプレゼンテーション、流暢な日本語を10か月でマスターする語学力には驚きましたが、それ以上に、取り上げられたテーマの多様性や好奇心の奥深さには圧倒される思いがしました……しかも質疑応答でもおじずに答える遅さには、『さすがオックスフォードの学生は違う』の一語に尽きます……ただショックだったのは、『日本の学生は議論しようとしなさい』という言葉でした。自分の考えを持っていない、自己確立できていない、はっきり考えを述べないとの批判が込められた言葉でもありました。曖昧さが美德とされてきた日本文化への痛烈な一撃です。日本が、グローバルの中でしたたかに生き抜くために何が必要か指摘された気がしました。

文学部が、こうして国家や文化に対する知識を深め、自己確立しえた人間を輩出できる学部になり、その中から日英文化交流の橋渡しにもなるべき人材が育っていくものと、大いに期待しています」

記念会の帰り道、すっかり雨は上がっていた。日英の学生たちが互いを刺激し合い、叡智と豊かな心を育んで、世界中の若者と共に、この混沌とした社会を、より良い地球に変えてほしいと、冬の夜空に願った。



新しい言語経験での気づき (KOJSPチューター活動)

前村 美月 (文学部言語学専修3回生)

1年間のチューター活動がもうすぐ終わりを迎える。始まる前は長いように思われた1年も振り返ってみるとあっという間だったように思われる。もともと「何か新しいことに挑戦したい」という漠然とした気持ちで応募したものだったが、活動を通してとても多くのことを得ることができた。今回はこのように投稿できる機会を使ってその一つを紹介したいと思う。

まずチューター活動について簡単に紹介する。この活動の主な目的はオックスフォード大学東洋学部日本語学専攻の学生の日本での留学生生活をサポートすることである。その内容は多岐にわたり、市役所や郵便局での各種手続きの補助は共通して行われることであるが、それ以外は担当する学生が何を望んでいるかによってさまざまにありえる。例えば私は日用品購入の手伝いもしたり、活動外で、部活動の紹介やコンサートのチケット購入も手伝ったりした。また担当する学生とのやりとりは基本的に「日本語」で行う。つまり自分が日本語母語話者として日本語学習者である学生と日本語でやりとりをするのである。これは私にとってとても新鮮なものであった。なぜなら今まで英語の「学習者」として母語話者の方と話す機会はあっても、その反対は全くなかったからである。そしてこの経験を通して私は大きな気づきを得ることができた。

それは私にとって英会話のゴールは「完璧な英語を話すこと」であって、会話を楽しもうとしたことが今まで全くなかったということ、そしてそれは間違っているということである。順を追って説明する。

私が担当した学生さんをMさんとすると、Mさんは日本語で話すことがとても得意というわけではなかったようだが、いつも積極的に私と話をしてくれた。最初の顔合わせの時もMさんから声をかけてくれたし、いつも自分のことをたくさん話してくれた。また私がMさんに話題を振った時、自分が答えた後私にも話題を振ってくれて、楽しく話をすることができた。そうやってやりとりをする中で、ある日、ふと私の中に疑問が起こった。それは私は英語で話を

する時このように楽しく会話をしたことがあるだろうか、また自分から会話を楽しもうとしたことがあるだろうかということである。そうやって考えてみると、私は英語で英語母語話者の方と話をするとき、「変なことを言わないよ



うに」や「間違えないように」としか思っておらず、会話を楽しもうとしたことがなかったことに気がついた。例えば英語母語話者の方に話を振られても、きちんと答えることにしか意識が向いておらず、きちんと答えることができればそれで満足して、その後会話を発展させることは全くしなかった。つまり、無意識のうちに私にとって英会話のゴールは「完璧な英語を話すこと」になっていて、相手と会話を楽しむなどということは一切考えていなかったのである。

しかしMさんと話していて、それは間違っていることに気が付いた。Mさんが話す日本語は完璧というわけではない。少し不自然な日本語もあったし、時制が違っていたりもした。でも私はMさんと話していて楽しかったし、高い満足感を得ることができた。対して、私はどうだろうか。正しい英語を話すことはできていたかもしれないが、自分自身会話を楽しもうとしていなかったもので、相手も楽しくはなかっただろう。どちらが良いかは明確である。もちろん円滑な会話のためには語学力も必要である。したがって完璧な英語で話そうと思うことや、そのために一生懸命勉強すること自体は悪くはないだろう。しかし言語は会話の道具であるので、そもそもの会話を楽しもうとか、相手に配慮したものにしようとか、そういう気持ちを持つことの方がずっと重要であることに気づくことができた。

今回のチューター活動で私はこのような気づきを得ることができた。しかし同じチューターでも今回の活動が自分の地域をもっと深く知ろうと思ったきっかけになった人もいて、活動を通して得られるものは人それぞれであると思った。この活動は人のためにも自分のためにもなるものである。ぜひとも多くの人にこのチューター活動に参加してほしいと思う。

【シリーズご寄稿・第6回】

「日々の記事を歴史に」

赤羽 佳奈子

信濃毎日新聞株式会社 松本本社
(国文学専修・2018年卒)

卒業後に寄稿の機会をいただき、6回目となった。毎年締め切りが近づくと夜な夜なパソコンに向かうのだが、記者の仕事をはじめてからはますます、自分を主語にする文章を書くのが苦手になった。新聞記事を書いていると毎日締め切りがあり、良くも悪くも昨日と明日の存在を忘れることがある。改めて1年間の自分を振り返る苦しさを味わうと同時に、こうした機会をいただけることに感謝したい。



新聞は歴史になる。入社時の研修で教わった。災害や事件の取材では少なからず意識するのだが、改めて思い出したのは、昨年、取材でお世話になってから交流が続いていた男性が亡くなったことがきっかけだった。

出会ったのは、記者になって2年目の初夏だった。男性は80代。自身の体調から、長年続けてきた伝統工芸の「農民美術」の木彫りを引退するため、最後の個展を取材してほしいとの依頼を受けた。農民美術とは、かつて農閑期の副業にと始まったもので、県内では土産品として現在も人気が高い。男性は定時制の高校に通いながら修業を始め、65年仕事を続けてきた。

自宅の横にある作業場にお邪魔し、取材した。修業時代の大変さ、農民美術が盛んだった頃からの時代の変化、生涯取り組んできた思い……。終始穏やかな表情で話してくれたのが印象的だった。後日、男性のこれまでの取り組みと最後の個展の開催を紹介する記事を掲載した。当日に会場を訪れると、展示販売されていた作品の多くは売り切れしており、男性は「新聞を見て遠方から来てくれる人もいてね」と話してくれた。

その後も男性は会う度に「あのときはあなたのおかげでたくさんの方が来てくれた」と振り返った。それは男性の作品と人柄に魅力があるからなのだが、それでも自分が記事にしたことで喜んでもらったこ

とが嬉しかった。男性は「まだ作ってくれと言う人がいるもんで」と、ペースを落としながら創作活動を続けていた。

翌年に転勤する際には、かわいらしい花が彫られた手鏡や実物そっくりのホオヅキの置物など貴重な作品を何点も贈ってくれた。その後も誕生日に贈り物をしたり、手紙を送ったりの交流が続いていた。

ある時、男性から体調が思わしくないことを伝える電話があった。2021年の年末にアルストロメリアを持って自宅を訪れると、普段と変わらずにこやかに迎えてくれ、一緒に写真を撮った。その花を気に入ってくれ、翌年の春、また送ってくれないか―と電話が来た。すぐに送るとお礼の電話があり、後日、ヤマユリを彫った立派なレリーフが届いた。他の作品と比べて少し線が細くなっている気がした。新聞のお悔やみ欄に男性の名前が載っているのを見つけたのは、その1か月ほど後だった。

一つ、心残りがある。弔問の帰り道、功績や関係者の声を取材して追悼記事を書きたいと思った。たくさんお世話になったのに、私には記事を書くことでしか恩返しができない。しかし、基本的に現地の記者が書くため言い出すことができないまま、後日、個展の記事の際に使った写真とともに現地の記者が書いた記事が載った。きっと私ではこんなに上手く書けなかっただろうとは思っていたけれど、それでも最後に自分で記事を贈りたかったという気持ちは今も消えない。

一方で、個展の記事で男性の歩んできた道のりの一端を紹介できたことを振り返り、よかったとも思えた。自分が書かなくても誰かが書いたかもしれないが、少なくともあのときに書いた記事は今後も記録として残り、また誰かの目に留まるかもしれない。自慢の作品と笑顔の本人が収まった写真とともに、優しく真面目な人柄も後世に残ってくれればいいと思う。こうして誰かの輝いた記録を歴史として残す仕事を続けたいとも思った。

一日一日を過ごしていると忘れがちだが、本当は新聞にも昨日と明日がある。調べ物をしていると、小さな記事でも「過去の記者が書き残しておいてくれてよかった」と感じる機会が多い。未来の新聞がどうなるかは分からないが、今の自分が書いた記事が誰かの役に立ったり、心を動かしたりできるように、日々の記事に向き合っていきたい。部屋の目立つ場所に飾ったレリーフを見て考えている。

歩くこと

田中 誠士 (文学部 1回生)

歩くことが好きで、よく歩いて移動する。用事まで時間が余った時などに電車の代わりに一駅分歩くこともあれば、休日にまとまった距離を歩くこともある。いずれにせよ、特に目的もなく歩く時間は楽しいものだ。例えば線路の高架に沿って歩くと、普段足元で死角になっている所が見える。高架下は、薄暗くて独特の雰囲気がある。電車から見える看板でも、自分の足で近づいてみると意外に大きかったり汚れていたりする。そんな発見が楽しい。

神戸の街は、何も考えずに歩くのに都合がいい。山と海に挟まれた地形のおかげで、南北は明らかな。北、つまり山に向かうと坂を登ることになり、(時に息切れを伴う)直接的な感覚によって、どこにいても方角がわかる。多少道に迷っても、概ね東西に走っている線路や大きい道路にぶつかるまで歩けばいい。方角をおおまかに見定めてしまえば、あとは気まぐれに歩いて迷うことがない。地点A、Bの間を最短距離で効率よく移動することの対極にあるような、文字通りとりとめのない「散歩」ができるのだ。

歩くときは、ゆるやかなマイルールがある。ひとつ目はスマホで地図を見ないこと。これはとりとめのなさを確保するためのルールだ。三宮から神戸港の突堤の方へ歩いた時には、工場や倉庫の多いところで迷いかけたが、方角だけを頼りに歩いていると建物の隙間に隠れているような小さな公園を見つけることができた。目的地へ真っ直ぐ向かうだけではできなかった発見だ。もうひとつはなるべく下を見ること。舗石のパターン、境界標、測量の基準点など地面にあるものを見てみると、地球の表面をアスファルトで覆って区切って暮らしている人間の不思議さといったナンセンスなことまで考えてしまう。歩くということは中途半端で、その間は生産的なことはできない。それでも場所から場所へ生産的なことをするために移動するという意味を与えることはできる。この目的と無目的の間にある歩くことを楽しむには、目的地までの道筋を意識しない方がいい。足元の景色は、その瞬間にいる場所に集中させてくれるのだ。

六甲の駅からキャンパスへも歩いて通っている。

通る道はいつもほぼ決まっているが、決まった道を目的地へ向かう時でも、歩くときにしていることは散歩の場合と変わらない。なるべくとりとめのなさに留まり、地面を見て連想を巡らす。坂を登り、授業を受け、また坂を下りる。

そんなふうな急な坂道を毎日「登山」するようになって、早くも一年が過ぎた。授業では、昨年末の専修決定を経て専門科目の割合が大きくなっている。教養科目のある鶴甲キャンパスではなく六甲台の文学部に直接通学することが増えたため、毎朝通る道も変わった。学校の風景も、5月以降着実に通常運転に向かって変化しているを感じる。中庭のベンチや図書館の椅子の配置は、向かい合って座れるように変わっていた。入学当初から対面授業であったものの大学生になった時にはすでにコロナが日常であった私には、コロナ前に「戻っている」という感じはなくむしろ新鮮だ。

歩くときにも、最近はマスクを外すことが増えた。マスクに覆われていた鼻や口元にも風を感じながら歩くと、街には色々な匂いがあったことに気づく。考えてみれば、屋外には匂いを遮断するパーテーションもないし、すれちがう人とのディスタンスを考えることもそれほどない。歩いている間は、この3年ほど意識させられてきた周りとの隔たりがないのだ。さらに、歩くときは自分自身も移動しているから、自分を周りから切り出すような固定的な境界もない。それでも、歩いている間は一人だと感じる。雑多な匂いをかぎながら、線を引くことによらずに確保されている不定形で自由な一人の時間を歩く。この感覚は、文学部の学びとも重なるかもしれない。興味のままに取っている授業で、知らない世界の広さに自分が溶け出すように思う。そんなとき、地図がなく全体が見渡せない中で自分にもなんとかつかみ取れる断片的な景色を頼りに考えると、溶け出した自分が再構成されるようで心地良い。新しい発見の瞬間だ。

これからは急ぐことなく、気の向くままに立ち止まりながら歩き、学び続けようと思う。



「大学4年目」

米谷 実紗(国文学専修 4回生)

2020年春、新型コロナウイルス流行の真ただ中に大学に入学した私も、この春で4回生になった。残された大学生活も1年を切り、時間の流れの速さに驚く今日この頃である。

大学入学当初は、4回生の6月にもなれば就職も決まり、卒業論文の見通しも立ち、関心のある授業を気ままに受けたり、長編小説を読むことに挑戦したりしながら、残された学生生活をのんびりと送っているものだと思っていた。

しかし、なかなか思うようにはいかないものだ。現在の私はといえば、来春からの行き先は決まらず、やる気は十分だが卒業論文の進捗は良いとはいいがたく、卒業するための単位の取得と大学院進学のための研究計画書作成に追われる毎日を過ごしている。月曜日から土曜日まで、毎日毎日重い鞆に引っ張られながら大学図書館に通っている。おかげで、何も考えずに買った半年分の通学定期が有効に活用されそうで安心しているが、なにやらバタバタして落ち着かない。

充実しているのは間違いないが、のんびりとは程遠い。それが私の大学4年目だ。

そんな私には、大学2年生の前期から欠かさず履修している授業がある。水曜2限の「国文学演習」である。内容を簡単に説明すると、学期ごとに指定された作品を、学生の発表と議論を通して〈読む〉というものだ。

2年前期にはじめて履修したときは、最初の数回を除いて、ほとんどオンラインだった。崩し字の読み方、白話語彙の調べ方、典拠となる作品との比較の仕方、先行研究の調べ方に、発表資料の作り方までとにかくはじめてのことばかりで、右往左往していた。演習なので、自分の発表準備をするだけでなく、議論にも参加しなければならない。「何を質問するんだ。そもそも質問って、どこから考えればいいんだ。」そんなことをクヨクヨ考えながら、自宅のパソコンの前で、他の人が出した質問の面白さに仰天し、自分の不勉強を痛感しているうちにあっという間に半年が経っていた。

演習は楽なものでは無かったが、それ以上に面白かった。「ああでもない、こうでもない」と膨大な

先行研究を前に頭を悩ますのも、対象テキストを半年かけてじっくり読んでみるのも。単なる二字熟語にしか見えないものの使われ方に注目してみることも。演習を通して〈読み〉を追求する楽しさは、私の好奇心を刺激するのには十分なものであった。

次の学期には別の演習を履修することもできたのだが、同じ演習を履修してしまい、そのままそれを4度繰り返して今に至る。

4年前期、5度目の履修ともなれば「右往左往するようなことなどない」と言い切れればよかったのだが、そんなに上手くはいかず、やはり私は頭を抱えている。何故か翻刻にはこれまでのどの回よりも時間がかかり、典拠作品である『本朝廿四孝』は浄瑠璃という慣れない形式であるためか、一向に頭に入っていない。『唐話纂要』をいくら捲っても目的とする単語を見つけられず、先行研究をもとにした考察は、遅々として進まない。読めば読むほど、回を重ねれば重ねるほど、わけがわからなくなっていくような気がする。

発表者に対する質問の方も、お世辞にもうまくなっているとはいいがたく、他の履修者の質問にハッとさせられることが多い。それでも、「議論に参加する方が〈読み〉を深められるのではないか、何か見えるものがあるのではないか」と思い、拙い質問を考えながら演習に参加する日々を送っている。

演習に参加する日々は、自分の不勉強を自覚する日々だ。上手くいかないことばかりだが、自分一人では上手くいかないことに対して、アドバイスをもらったり、他の受講者や先生と一緒に考える機会を持ったりするのも、演習の大事な役割なのではないかと思うことにしている。

大学4年目の6月。サークルを引退してから半年が経過した。友達はそれなりにいるけれど、皆、それぞれに忙しそうだ。かく言う私も研究計画書作成と卒業論文に振り回されており、趣味の聖地巡礼に行く余裕を失いつつある。それでも毎週、水曜2限はやってくる。雨でも風でも暑くても、鞆の重みに逆らいながら、私は演習室に向かうのだ。

その足取りは、案外軽い。





特別寄稿「文学部のこれまでとこれから」

長坂一郎 (人文学研究科長・文学部長)

文学部のこれまで

皆さんもご存知のとおり、文学部の歩みは1949年文理学部(文科・理科)が置かれたことから始まりました。そのうち文科には哲学科・史学科・文学科の3学科が設置されました。いわゆる「哲・史・文」が当初から揃っており、そして、現在も変わらずこの3つの分野が文学部の中核をなしています。その後の歩みについては、『文窓(ふみのまど)』17号(2019)の特集『令和元年から振り返る神戸大学文学部の70年』に詳しく掲載されていますので、参照していただければと思います(「文窓会」のホームページから、バックナンバーを読むことができます)。

ただ、それだけでは、「文学部のこれまで」を振り返ったことにはなりません。そこで、たまたま『御影・六甲の半世紀 神戸大学文学部の歩み』(以下、『文学部の歩み』)という書籍を最近になって文学部の倉庫で発見しましたので、この本に記されている事柄のうち、「文学部のこれから」と関連する部分について紹介したいと思います。なお、この本は1998年に文学部創立50周年事業の一環として出版されたもので、その編者の中には前の研究科長、奥村弘理事・副学長の名前があります。

文学部の定員の変動

1949年文理学部が設置された当初は90名の定員でした。その内訳は哲学45名、史学30名、文学15名。そして、1967年度に国文学近代の講座が新設されることにともない、100名へと増員され、1987年度からの臨時増により120名に、さらに1991年には135名となりました。この数が、これまでの文学部定員の最大数となっています。その後、1993年に臨時増が終わり115名となり、2017年には「文学部不要論」が吹き荒れる中、100名に減員され現在に至っています。

こうして改めて定員の増減を俯瞰的に眺めてみますと、その数は経済的な発展や、人口増、さらには短期的な世相に左右されているように見えます。また、文学部の「これから」に目を向けてみますと、少子化という現実があり、さらには、大学における情報系の学部・研究科の定員増など、定員に影響しそうな事柄が目前に迫っています。しかし、「哲・史・文」を中核とした文学部の営みは、そうした時代の流れには本来左右されないはずのものです。文学部の不動の営みをこれまで通り続けつつ、新たな試みに挑戦し続けなければならないと、これら

●4月12日 2023年度新生歓迎会、開催 (文学部ロビー)

昨年度から対面形式に戻った新生歓迎会。今年度はようやく、新型コロナウイルス感染症の流行前に近いかたちで開催することができました。103名の文学部新生のほとんどが参加し、盛況となりました。

当日は新生生たちが前の授業からあわただしく会場にやって来て、午後3時10分より開始となりました。長坂文学部長、武藤文窓会会長の挨拶に始まり、文窓会役員と文窓賞の紹介があった後、各専修と留学生担当教員からひとしきり専修紹介がありました。

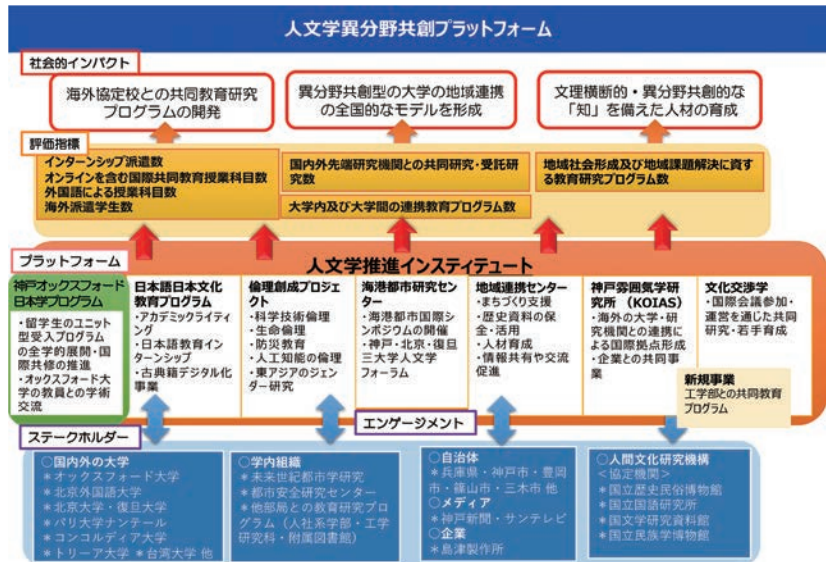
それから、各種取り揃えたお菓子(学生たちには、塩味のお菓子よりも、甘いお菓子のほうが好評だったようです)とお茶によるティーブレイクを挟み、各専修と留学生のブースに分かれての歓談となりました。各専修のブースでは教員に加えて先輩学生や大学院生も参加し、それぞれの専修に関心のある学生が入れ替わりで先生や先輩たちの熱のこもった話に耳を傾けていました。また留学生のブースには担当教員に加えてオックスフォード大学からの留学生らが参加し、

の数字を見ながら改めて感じています。

教養教育の改変

『文学部の歩み』によれば、神戸大学で、教養部の設立が具体化し始めるのは1959年ごろから。そして、当時の大学の評議会では、教養部設立の目的として、教養部を持たなければ旧帝大級の総合大学になれず、文学部や理学部などで大学院を持ってない、という主張がなされていたそうです。そして、事実、教養部が設置された1964年に工学研究科、65年に理学研究科が設置され、68年には文学研究科(修士課程)が設置されることとなりました。しかし、1992年には教養部を解消し、国際文化学部を新設し、教育学部を改組して発達科学部とする改革が決まり、これによって神戸大学における教養教育のあり方が大きく改変され、それにもなって文学部の学生は現在のように1年生から学部にも所属することとなりました。

そして、いま再びこの教養教育を大きく改変することを大学は計画しているようです。教養部を設立してから28年後にそれを解消し、その30年後にまた教養改革をする。大学というところは30年ごとに教養教育を改革せずにはいられない組織なのでしょうか。たまたま私はこの教養教育改革のWGのメンバーの一人ですが、そこで行われている議論を見ている限り、そもそも「大学教育における教養とは何か?」という問いに対する明快な答えが見つからないことが、こうした迷走を引き起こす大きな要因となっているように思われてなりません。文学部には「人類の叡智の蓄積



図：人文学推進インスティテュートの構成(内容は次ページ)

としての古典と現代的問題を結びつけて考える」という不動の営みがあり、それは「哲・史・文」、そして、心理学、言語学、芸術学、社会学、美術史学、地理学という学問分野によって着実に遂行されるという明確なビジョンがあります。一方で、大学という様々な学部を擁する組織における教養教育においては、そうしたビジョンがなかなか見つからないのが現状です。

一方で、教養教育は文学部の今後にも大きな影響を与えます。語学教育はもちろん、文学部の1、2年生は教養教育の授業に多くの時間を費やし、大学生として身につけておくべき「教養」を学びます。また、教養部の設立の当初から、教養改革は大学全体の組織のあり方に影響を与えてきました。それが、文学部に対してどういった影響があるのか注視していくとともに、文学部生の学びのかなりの部分を占める教養教育について、文学部としてもその改革に関与し続ける必要があると考えています。

留学に関心のある学生たちが話を聞きに訪れていました。

閉会は午後5時。どのブースでも話に花が咲き、そこで終わるのが惜しいようでした。新入生も教員も、対面での交流の機会にとっても楽しそうに話をしていたのが印象的でした。お茶とお菓子という潤滑油の重要性も、再認識しました(健全!)。次年度も、このようなかたちで開催できることを期待しております。

また新入生歓迎会の開催、会場の設営等にあたっては、文学部学生委員の佐々木先生、梶尾先生にご尽力いただきました。(当日司会:梅村麦生)



文学部の現在

現在の文学部は、哲学、文学(国文学・中国文学・英米文学・ドイツ文学・フランス文学)、史学(日本史学・東洋史学・西洋史学)、知識システム(心理学・言語学・芸術学)、社会文化(社会学・美術史学・地理学)で構成され、459名の学部生が在籍しています。つまり、「哲・史・文」+知識システム・社会文化という構成になっており、文学部の中核(哲・史・文)と現在社会が求める学問領域(知識システム・社会文化)が併存するという、まさに「人類の叡智の蓄積としての古典と現代的問題を結びつけて考える」というビジョンに基づいた構成となっています。このビジョンと構成の合致、どの分野もその専修名を見れば即座に学問領域がわかるという明快さ、これが文学部の魅力であるとともに強みにもなっています。

文学部のこれから

「人文学推進インスティテュート」

文学部には、昔から変わっていないということによって評価されている部分も確かにあるのですが、定員の変動や教養教育の改変にともなう組織改革、そして、常に変化する社会からの要請を鑑みると、やはり、時代の変化を捉え、さらには、それに向き合い、探究を進めていくという努力も必要です。こうした背景から、文学部・人文学研究科では2年前に「人文学推進インスティテュート」(P13図を参照)という組織を立ち上げました。その目的は、これまでも活動していた4つのセンター・プロジェクト(地域連携センター・海港都市研究センター・倫理創成プロジェクト・日本語日本文化教育プログラム)の事業間の連携を進めることと、新たな人文学研究科の共同事業を育成し発展させることです。

ご存知のとおり、地域連携センターは2002年に設立されてから着実に実績を積み重ねており、センターとしての拠点機能強化や大学間連携ネットワークの構築、国公立大学フォーラムの開催など精力的に行っています。文学部発のプロジェクトとして、これまでに類を見ないほどの成果を上げていることは確実です。

海港都市研究センターも2004年に設立されて以降、現在まで継続して活動を続けています。私も、この6月に当センターの活動の一環として、台湾の台北にある中国文化大学で開催された国際会議「第3回東アジア学領域横断ネットワーク」で講演してまいりました。韓国・台湾・中国・日本の研究者が集まり、近年、政治的な状況が目まぐるしく変化している東アジアの現状について、活発に意見が交換されていました。

倫理創成プロジェクトは、グローバル化と科学技術時代が求める新しい倫理規範の可能性を学際的に探求するものです。本プロジェクトに関連して、「東アジアの母性礼賛とミソジニープロジェクト」も昨年度から開始されています。東アジア各国のジェンダー問題や、そうした問題に対して反発する動き(バックラッシュ)に対して提言を行うためのシンポジウムを現在企画しています。

新たな試み

雰囲気学プロジェクトは、新学術領域としての「雰囲気学」を創出・展開するために、2022年のインスティテュート発足時に設立された新しいプロジェクトです。哲・史・文をはじめ心理学・芸術学・地理学などの研究者と協力して、ひろく「雰囲気(英語: atmosphere)」に関連する現象を、分野／文化横断的な視点から包括的に研究しており、今後は国際的・分野共創的(法学、経済学、医学など)な展開をしていく予定です。

また、2011年に始まった神戸オックスフォード日本学プログラムは、オックスフォード生を迎えてから今年で12年目となります。その間、オックスフォード大学東洋学部日本語専攻の2年生全員が1年間を神戸大学文学部で学習するという、ユニット受け入れ型のプログラムを安定して継続しています。

これらの2つのプロジェクト・プログラムについては、本年度から株式会社島津製作所の支援を受けて、新たな試みを開始したところです。具体的な協働の在り方は現在模索中ですが、雰囲気学プロジェクトにおいては「雰囲気を測定する」、「社内の空気を変える」など魅力的なキーワードが出てきています。また、KOJSP に対しても、海外拠点を多く抱える企業が、どう日本文化に向き合うかという課題に対して、何らかしらのヒントが得られるのではと期待されています。

おわりに

「文学部のこれまでとこれから」について、様々な側面から紹介させていただきました。文学部は今年で創設74年目となりますが、この間、ここで紹介したこと以外にも、様々な飛躍や困難があり、現在に至っていることは言うまでもありません。しかし、何度も申し上げますが、文学部の活動は、変わらない核となる部分と、それを包み込む新たな挑戦とで成り立っています。今後も、この2つの面を大切にしながら、研究教育に邁進していく所存ですので、文窓会の皆様には、今後ご支援、ご協力をよろしくお願いいたします。

文窓会（文学部同窓会）—— 会計報告 ——

令和4年度収支計算書（令和4年4月1日～令和5年3月31日）

【収入の部】	
今年度収入合計	¥4,025,695
会費納入金	3,320,000
協力金	685,000
雑収入	20,695

【支出の部】	
今年度支出合計	¥4,929,626
事業活動費	¥2,582,279
会報費	1,609,421
歓送迎会費	475,660
文窓賞費	362,610
ホームページ管理費	8,250
総会費	7,038
活動援助費	50,000
名簿管理費	69,300
協力金費	¥1,220,000
学友会費	110,000
学術助成費	1,110,000
事務局費	¥787,962
事務業務委託報酬	357,400
家賃・水道光熱費	106,153
通信費	71,074
旅費交通費	56,970
消耗品費	196,365
支払手数料（振込・振替料金）	¥57,293
会議費	¥229,954
渉外費	¥52,138
今年度取支	(-) ¥903,931

前年度繰越金	¥21,656,105
今年度取支	(-) ¥903,931
次年度繰越金	¥20,752,174

令和4年度財産目録（令和5年3月31日現在）

I. 資産の部		¥21,532,174
現金		21,517
(ゆうちょ銀行) 普通貯金		79,036
(池田泉州銀行) 普通預金		111
(みなと銀行) 普通預金		9,372
(ゆうちょ銀行) 振替口座		4,834,823
(ゆうちょ銀行) 定期貯金		6,002,910
(みなと銀行) 定期預金		1,007,176
(みなと銀行) 定期預金		1,510,257
(みなと銀行) 定期預金		8,066,972
II. 負債の部		¥780,000
預り金（校友会費）		730,000
未払金（活動援助費）		50,000
III. 正味財産合計		¥20,752,174

事業年度に係る決算報告書を監査した結果、適正であることを認めます。

令和5年6月14日

会計監査 花 木 直 彦 印

会計監査 三 宅 征 彦 印

文窓会東京支部だより

第15回文窓会東京の総会及び木曜会を下記にて開催しました。

1) 総会：日時:2022年11月21日(木) 12時から14時まで(昼食をはさみ)

場所:東京六甲クラブ(日比谷)

参加者:(敬称略) 川谷愛作、絹川ひとみ、中野裕、田中勉 4名

2) 木曜会：日時:同日14時から約2時間

場所:上記と同じ

講師:古市晃先生、タイトル:「初代神武天皇の謎」

Zoomによる講演。

次回(第16回文窓会東京の総会&木曜会)は、2024年3月を予定しています。

文窓会東京支部：支部長:中野裕、副支部長:田中勉

東京支部への連絡窓口:中野 裕

〒223-0064 横浜市港北区下田町1-1-113

Tel&Fax: 045-561-6317

携帯電話: 080-3503-1658

メールアドレス: y.nakano.1938-panda@d9,dion.ne.jp

振り返れば六甲の山並み～あの頃の友に会いたい

第17回 神戸大学&文学部ホームカミングデイ2023

— Kobe University Homecoming Day 2023 —

10/28 土

神戸大学ホームカミングデイ2023

10:15～記念式典

於：出光佐三記念六甲台講堂(登録有形文化財)

YouTubeにてライブ配信

文学部でのホームカミングデイは、午後から!!
待ち遠しかった対面で!懇親会にもぜひ!!

※詳しくは 下記のホームページをご覧ください。

第17回 神戸大学 ホームカミングデイ 検索

誘い合わせて、お気軽にお越しください!



文学部ホームカミングデイ2023

13:00～13:30 受付 文学部A棟1階エントランスホール

会場:文学部B棟132教室

13:30～13:40 開会挨拶、文学部長挨拶

13:40～14:30 卒業生による講演

〔講演①〕夜市から考える台湾社会
(神戸女学院大学・藤岡達磨氏 2010年度修了)

14:30～15:20 〔講演②〕「読むこと」から「書くこと」へ:
大学で創作を教えるとはどういうことか
(愛知淑徳大学・松田樹氏 2021年度修了)

15:20～15:30 休憩

15:30～16:00 第17回文窓賞授賞式及び受賞者スピーチ

16:00～16:20 文窓会総会

16:30～18:00 懇親会 瀧川記念学術交流会館
(参加費:3,000円/当日)

<併設企画>

12:50～16:00

文学部A棟1階
エントランスホール

展示:教育研究プロジェクトの活動記録など

■お問い合わせ先
人文学研究科総務係

〒657-8501

神戸市灘区六甲台町1-1

Tel: 078-803-5591

文窓会(文学部同窓会)
ホームページ

<http://www.kobe-u.biz/bunsokai/>

* 第17回文窓賞(学生レポートコンテスト)入賞者の作品は、ホームページ「文窓」でお読みいただけます。

(今年はぜひ、あなたも輪の中に!)

写真は過去の懇親会の様子です。長かったブランク…
コロナ前の懐かしい時間にやっとながらう!つなげよう!

